

尼崎紡績 先駆のM & A と 技術革新で日本一の紡績会社

1889年（明治22）6月、創立 尼崎の商人本咲利一郎、梶源左衛門、大塚茂十郎、中塚弥平らに旧尼崎藩の士族が加わって、尼崎側28人、それに広岡信五郎（初代社長）・木原忠兵衛ら大阪の有力財界人17人が参加して発起した。尼崎近辺は日本で最良質の阪上綿の産地であったが、実際には安価で比較的長繊維のインドや中国・安南産の綿花が用いられた。1895年末の労働者数は2,544人。技術的に困難な細番手と中番手の生産に主力を注ぎ、これが尼紡発展の一つの要因となった。その後、日露戦争を契機として飛躍的に発展した。

1906年には織布工場として東洋紡織を資本金200万円で設立し、1908年にそれを吸収合併。1914年（大正3）に東京紡績、1916年に日本紡績を合併した。さらに1918年6月に摂津紡績を合併して大日本紡績（株）と改称、日本最大の紡績会社となった。1964年（昭和39）4月社名をニチボーに変更、さらに1969年10月日本レイヨンと合併して新社名をユニチカとした。なお、1900年（明治33）に建築された赤れんが造りの尼崎紡績本社建物が、ユニチカ記念館として現在も故地にそのまま残っている。1945年6月15日の空襲により、尼崎工場は紡績・織布両工場など多くの施設を焼失し、全機械設備の91%喪失という壊滅的な被害を受けた。その後、残存した宿舎を利用して縫製工場として再発足することとなり、1946年7月ミシン100台をもって操業を開始した。1950年9月のジェーン台風の際には、高潮による大きな被害を受けた。その後操業を続けたが、1965年3月をもって尼崎縫製工場は廃止された。（出典 apedia 写真および地図 尼崎市立地域研究史料館）

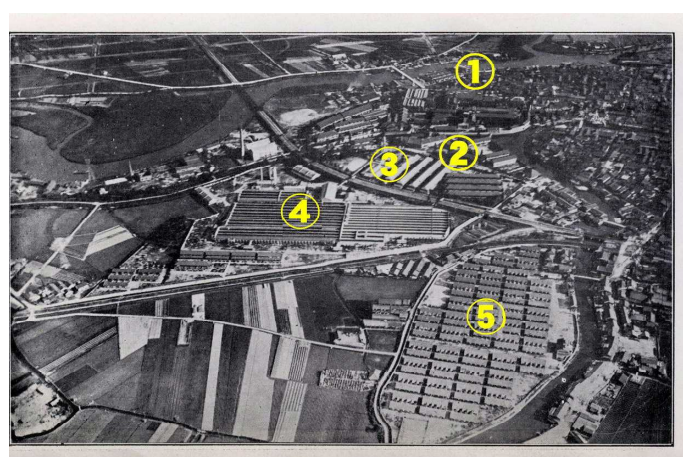
①が最初の工場、②と③は寄宿舍（独身寮）、④が杭瀬工場（増設新工場）、⑤が社宅（家族寮）。急激な発展によって、僅か10年ほどで、④の場所に工場を新設した。レンガづくりの旧工場①では、柱の間隔なども狭く、大型機械の導入には不向きであった。そこで、新工場は効率的な設計によって、工場らしい造りと景観になっている。



明治時代の尼崎紡績の工場分布



大正時代の工場分布



昭和7年頃の尼崎紡績（大日本紡績尼崎工場）



創設当時の工場 建築中



* 社宅

尼紡 自前でのインフラ整備 病院・学校・電話・電灯・遊園地…

明治以降、日本の成長とともに尼崎紡績も飛躍的に発展しました。1891年、尼崎紡績で自家発電による点灯が、尼崎最初の電灯です。1893年、尼崎紡績で本社と大阪出張所を結ぶ電話が架設されます。これも尼崎初です。さらに、病院や学校経営、遊園地なども整備しました。従業員とその家族を含めると、数千人が、この界隈で働いたり暮らしていました。今でいう企業城下町といったところです。



*** 広大な調理場**



*** 大食堂**

*の印は、尼崎市教育委員会歴博・文化財担当所蔵絵はがき

* 尼崎紡績付属病院



診察室



* 講堂での僧侶の説教



尼紡附属小学校開校式

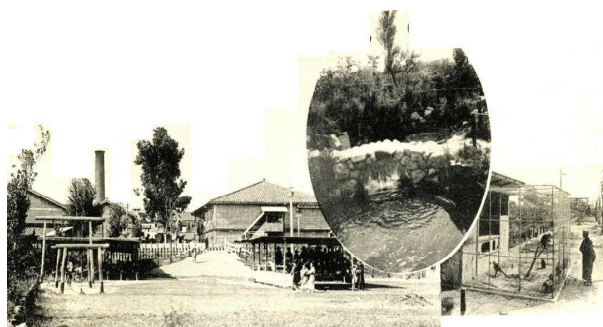
明治40.11



建築中



完成した工場



*** 尼崎紡績 池/動物/遊園地(レジャーランド)**